

真宗まめ知識

方便法身の尊形としての本尊

どこのお寺でも必ず本尊があります。座っていたり立っていたり、形は様々ですが、ご本尊のお姿は、それぞれの宗旨の教えを表しています。

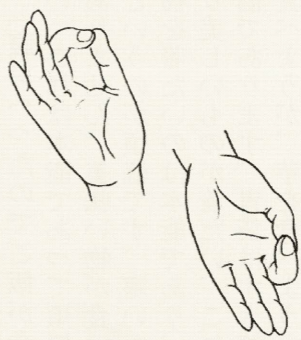
ですから各家庭のお仏壇には、必ずそれぞれの宗旨で定められているご本尊を安置しなければなりません。私たち浄土真宗では、ご本尊は、阿弥陀如来の立ち姿の絵像または木像を安置することになっています。

曹洞宗では、釈迦牟尼仏の坐像をご本尊としています。これは座禪を組み、瞑想に入られている姿であり、修行によって悟りを開く姿です。自ら行う苦行や誓いを元として、煩惱を断ち、仏の悟りを得るという姿が示されているのです。

浄土真宗のご本尊のお姿は、蓮台の上に立ち上がり一歩足を踏み出し、両手に親指と人差し指で輪を作り、右手を上へ挙げて左手を下へ下げているお姿です。このお姿はどういう意味があるのでしょうか。

まず蓮台の上にお立ちになっている姿は、蓮は泥沼に咲く花であり、自分だけ良ければよいという考えが満ちている泥沼のごとき今の世に現れたという意味です。次に右手は限りなく智慧を表し、左手は限りなく慈悲を表しています。次に蓮台に上がり一歩踏み出している姿は阿弥陀如来の摂取不捨(悩み苦しんでいる

全ての人々を必ず救うとお誓いになられた)の願いを表しているのです。最後に阿弥陀如来の後ろから光が出ています。これを後光といい、如来の願いが成就していることを表しているのです。この姿を「方便法身の尊形」としていただくのです。



(文責住職)

新僧侶誕生

今年四月に板柳町の大蔵町にお住まいの木村和善さん四十六歳が出家得度して正休寺の僧侶となりました。



これから少しずつお寺のお手伝いをしていただきますのでよろしくお願ひ申し上げます。

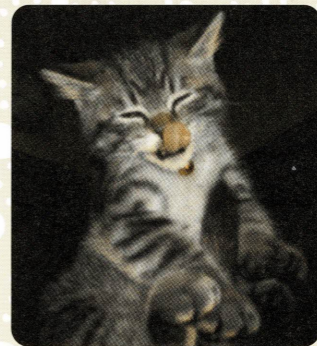
同朋会の日程

- 7月17日(木) 日帰り旅行(深浦「みちのく温泉」)
 - 8月20日(水) お盆法要
 - 9月23日(火) 彼岸法要
 - 10月14日(火) 定例学習会
 - 11月25日(土)～26日(日) 函館別院一泊団参
 - 11月27日(木) 正休寺報恩講参詣
 - 12月9日(火) 忘年会日帰り旅行(浅虫温泉)
- ※基本的には毎月第2火曜日の午後1時開催予定です。テキストは歎異抄。お茶・お菓子をいただきながら自由な語り合いの場です。会員以外の方も参加歓迎です。

お庫裡からのつぶやき

我が家に拾われてきた雄の子猫の「ミルク」、一年半たったある日、もういたずらもなくなり落ち着いてきたからと、「猫の檻」は必要ないと片づけしたその日の夕方から帰って来なくなった。その半年後、雪のちらつく路上に捨てられていた雌の子猫「モモ」を長男の正弥が拾ってきた。目やにで目は閉じたまま、ミルクも飲めなかった。スポイトで少しずつ飲ませた。八ヶ月たった今は、すくすく成長し、おてんば振りを発揮している。

出かけようとすると一緒にいくと玄関先で待機、帰って来るとちゃんとして出迎えてくれる。お風呂に入っている間はバスマットの上でズーツと見張り番。家事をしている足元に絡まったり、この場所が好きなのと私の膝の上に乗ってきて丸く



なる。本当に甘え上手。そうすると不思議な事にイタズラも可愛らしく思え怒れなくなってしまう。でも、「モモ」の為にもきつちりと躰をしないと直す。イタズラ現場を見つければダメだよと教えるから「前のミルクはこうではなかったのになあ。」とこぼしたことがあった。そうすると子供達に「比べるものじゃないよ。ミルクはミルク、モモはモモなんだから」と言われた。ハツとした。その一言にいろんな思いがよぎった。バタバタと過ぎていく日々の中で、ふと立ち止まった一時、ありがたいものです。(坊守)

正休寺だより

第4号

平成20年7月25日発行
板柳町大字板柳土井241
TEL.0172-73-2016

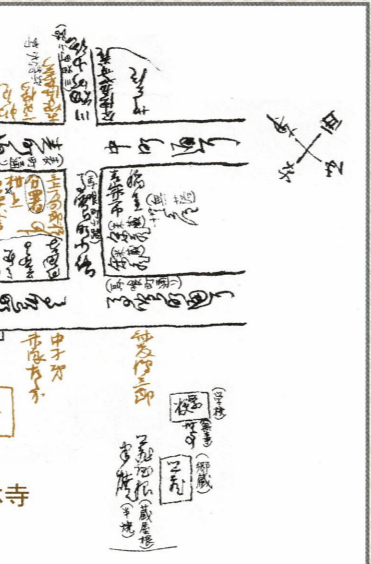


正休寺本尊「阿弥陀如来」

松山唯三郎の日記によると「明治二十四年三月二十九日午後二時三十分頃、表町より出火、多くの家が類焼。正休寺は佛様だけ無事で本堂は焼失」と記されている。地図の朱筆のところが焼失家屋である。

この火事は、十三軒を焼失する大火であった。当日は、風が表町より東の方に吹いていたらしく、表町より飛び火して、博労町の一部と茅屋根であった正休寺が類焼した。

また、現在、板柳町の重要文化財に指定されている山門は、銅板葺であったので類焼を免れた。図中で当時は、仲町を「中町」と、博労町を「馬喰町」とそれぞれ記されている。



日記を記した松山唯三郎はどういう人物であったのか。松山家の先祖である松山忠左衛門は、明暦二年(一六五六年)に九州肥前の国より津軽に移住し、以後、井筒屋「忠」(かねちゅう)を名乗り、「忠一」、「忠二」、「忠三」、「忠四」の分家があつた。当時の津軽最大の長者となり、安政時代の津軽長者番付では、東大関(筆頭)と記されている。

唯三郎は「忠与」の三代目目、井筒屋の屋号で、味噌・醤油の醸造業を営ん

でいたもので、「日記」を詳細に記し『唯三郎日記』と称され、これは当時の時代を知る重要な資料文献となっている。また、「忠与」四代目の鉄三郎は、与謝野鉄幹・昌子夫妻など中央の一流文化人を招き、板柳町の文化の向上に努めた功績が大きかった。

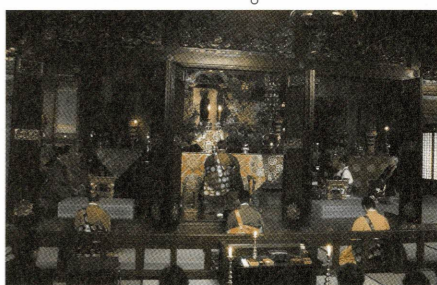
各当番講中のお同行が 力を合わせ御齋のご接待

二月の初御講、四十名程の方がお手伝いに来て下さり、御齋（おとき）定番となった煮魚、ねりこみ、高菜の粕汁など二百七十人分を手際良く準備して下さいました。また、住職の法話の後、昨年同様三味線演奏が行われ、演奏者の方は「皆さんの真剣に聞き入る姿と本堂という厳かな中での演奏に感じるものがありました。」と話されていました。



三月の当番は沿川講中。永代経法要の最後の日でもあり、お齋の準備も数多く大変ご苦労さまでした。終了後の皆さん集まっていた反省会の様子からも、講中の方々の

のまとまりを感じるところでした。持ち寄りされた美味い漬物がたくさん並んでいたのが印象的でした。講師は、毎年北海道より来て頂いている竹橋修先生でした。



四月の御講は新和講中。農繁期に重なり参加者の少ないことが多かったのですが、今年は嬉しい事にお忙しい中ご参詣の方が多く、お齋の数を急遽追加する場面もありました。後片付けが早く、手際の良さは私自身も見習うべきところです。



ご法話
は、弘前市新寺町の法源寺様の若さん藤森彦先生にご法話頂きました。

「一切皆苦」 理性の闇を切り開く

楽も苦もどちらも苦しみ

「あれさえ手に入れば幸せになる、あの人さえ居なければ上手いくのに」と私たちは目ごろ思っています。ところが、思ったとおりに満足すると、それで自分が本当に満足するかというとそうはならない。新たな欲しい物が出てくる、いやな人が出てくる。つまりそれで満足するということがないのです。それだけではなく、かえって思わぬ苦勞がひつついてくるのです。

新しい自動車でも買うまでは楽しみだが、手に入ると、今度は買い物に行っても駐車場で傷つけられはしないかと、安心して買ってもできず苦勞が絶えない。

仏教では、楽と苦と二つあるように考えていることが迷いであると考えています。人間の考えているような楽は、楽という顔をした苦であり、苦でないものは一つもない。「一切皆苦」と教えているのです。

苦しみのもとは渴愛

満足が得られないとどうなるか。もっと楽なことが得なことを求めることになり。それで、私は、「弟子らよ、汝の苦しみは、もとは渴愛（かつあい）である」とハッキリ言われた。渴愛というのは、飲

めば飲むほど喉が渇くようなものだという意味です。これは家、車、旅行、名誉、皆そうです。手に入れば入るほど、もっと良いものが欲しい、もっと便利なものが欲しい。つまり、手に入れば入るほど不満が増大してくるのです。

日常生活に埋没

よくよく考えてみると、ものが身につくことは絶対なのです。心が身につくのです。たとえば、ご馳走というが、ご馳走は身につかない。食べれば食べるほど、もっと美味しいものが食べたいという欲望だけが身についてくる。お金でもそうで、益々欲しい心だけが身についてくるのです。

「一切皆苦」の自覚がなければ煩惱に縛られ、日常生活に埋没してゆきます。

日常生活で最大の欠陥は、本当の意味の批判がないということ。見たもの、聞いたもの、考えたこと、そういうものに対して吟味が欠けているために、心がそれらに対して散るのです。見れば見たごとく、聞けば聞いたごとく、間違いない。考えれば考えたことが正確であると思いきや、はたしてどうでしょうか。

こういう検討の無いのが日常生活の特徴です。私たちは、よくこれが現実だと言います。しかし、私たちの言っている現実とは、考えた現実であって本当の現実ではありません。もし本当の現実なら、



正休寺「御講」当番

七月二十八日・・・小阿弥講中
八月二十八日・・・畑岡講中
九月・・・休み
十月・・・休み
十一月二十八日・・・六郷講中
報恩講二十六日～二十八日
十二月・・・休み



五月は板柳講中が当番でした。旬のワラビを使った和え物をはじめ、珍しいお料理を食べさせてもらいました。男性の方も会計を取りまてていただいたり、あの大きな台所での作業風景が、何かしら家庭の中の一場面の様な温かい雰囲気とする空間でした。

自分の心に縛られる

自分の起こした心に自分が縛られるのです。ですから本当の自由とは、他から縛られないということではなく、自分の心に縛られないことですが、これは容易ならぬ外にばかりにものを求め解決を

煩惱と本能の違い

よく「煩惱がなければ生きていけない」という人がいますが、それは煩惱を知らないからそういうので、この場合はたいてい本能と煩惱とを間違えているのです。

「腹がへつたのでご飯が食べた」これは本能であって煩惱ではありません。美味しい物が食べたいというのが煩惱です。寒いから着物を着たいのは本能であり、人より美しいものが着たい、これが煩惱であります。胃袋はすき焼きを食べようが、芋を食べようが同じようにふくれます。胃袋は決して芋だからふくれてやらぬとは言いません。素直にふくれてくれます。ところが、芋では満足できないというのは、芋が満足させないのではなく、満足しない心がある。その心に人間が縛られるのです。

夢から覚めたという嘘

なぜ仏教では自覚を夢から覚めたという嘘（たと）えで語られるのかというと、私たちに夢を見るという経験があるからです。恐ろしいものに追いかける夢を見たとしましょう。夢の中では、それは非常に確かなもので、これは夢だから心配ないというわけにはいきません。やはり、一生懸命、逃げる。けれども、パッと目が覚めた瞬間に「ああ、夢か」と知った時には、もはやそれがどんな恐ろしいものであっても、それから解放されている。夢が覚めても、まだ恐ろしいということはないはずで、覚めたとたん人間はどんなに恐ろしいものであっても、それから解放されているのです。

自覚は必ず解脱を伴う

つまり、仏教のいう自覚は必ず解脱（解脱）を伴う。解脱の伴わない自覚は自覚にならないのです。仏教の教理を知る事が解脱になるのなら、色々な書物を読み、学問した人々は全て目覚めていなければならぬはず。しかし、知識をもって仏教に捉えても、それは仏教にならない。知識や理性を

分別したものに苦しむ

分別は別に問題ではない。「執」が問題なのです。分別は実体の無いものでも分別する。心配などもそうです。無いものを分別して、その分別したものに縛られて苦しむのです。

よく人生が行き詰まったと言います。しかし人生は行き詰まっていない。行き詰まったのは分別であり私の思いであります。このように分別を分別と自覚する。これが仏教でいう自覚です。このとき

はじめて人間はあらゆる分別したものに縛られている状態から解放されるのです。こういう覚め方をもったときに、はじめて無執の分別、執着のない透明な理性を取り戻すことができるのです。